

アトモスフィア

閑話閑談

山口(藤田) 陽子*

ポストドク問題：今と昔

あと2年で大学での定年を迎える団塊世代の私が気になっていることを書いてみたい。博士課程修了の頃にはオーバードクター問題が顕在化していた。大学や研究所に職を得なかった者は、日本学術振興会の奨励研究員として同じ研究室に残るか、留学と称して2-3年海外に行ったものである。その後大多数は、教授が紹介してくれる助手のポストなどに収まり帰国した。私は、学振の奨励研究員を5ヶ月で返上して教授の後輩が主宰するアメリカの研究室に留学した。3年間のポストドク後アメリカに留まり、独立して20年間 Principal Investigator (PI) としてキャリアを積み、2000年に帰国した。日本では研究費を取ったことがなかったためゼロからの出発であったが、研究室をどうやら立ち上げ12年が過ぎた。

留学とは、実はPIのもとでポストドクをすることなのだが、“お客様”として短期で研究に専念する機会と考えられていた。ポストドクはPIの研究領域に入り成果を出しつつ、ある意味では競争相手となるポストからうまく独立しなければならない。日本の研究者は、このポストドク・PI関係を理解していない面が往々にしてあった。PI、知的財産権などに対する意識が低かった。そこで、2002年の生化学大会で、新井賢一先生とラウンドテーブルディスカッションを企画し、アメリカでの研究体制とキャリアパスを紹介した(生化学75, 1260-1269, 2003)。当時、ポストドク1万人計画が進行中であったが、未だにポストドクシステムが日本に定着したとは言えない。前置きが長くなったが、ここからが本題である。

ポストドクは研究者として自立する前の修行期間として必要である。出身研究室とは異なる研究室で、すでに持っている専門知識・技術を提供しつつ、新たな思考法・技術を獲得できる形が良い。PIの研究領域で確実に成果を挙げ、数編の原著論文を筆頭著者として出さなくてはいけない。ポストドクは、2-3年で独立するつもりで研究の芽を育てなくてはいけない。他方、PIは研究者を育てるという意識を持って、ポストドクが成果を出せるような環境を整え、2-3年後にポジションを得て巣立つように導かなくてはならない。付加価値を付ける為の2度目のポストドクを妨げるものではないが、PIが自分のポストドクを2度目のポストドクに送り出したとすれば、それは恥と知るべきである。

さて、日本では大型研究費が多数交付されている。学位取得後にポストドクとして研究に参加するのが一般的になってきた。しかし、PIが労働力としてポストドクを使い捨てにしているのではないのか？ ポストドクはポストドクで、一介の研究者としてその地位に安住してはいないのか？ 今、オーバーポストドクが深刻な問題となっている。2階に上がって梯子を外されたようなものである。そもそも、研究者の資質がない院生に博士号を取らせるべきではない。ポストドクの段階でその資質を疑われる場合に後戻りが出来ないのは、本人にとって大変な不幸である。大学や研究所に職を取れない場合に、別の道が開かれていなくてはならない。加えて、日本的システムでの最大の問題は年齢制限である。アメリカでは博士をとってからの年数で若手研究者であるかが決まるが、日本では学振などのポストドクの応募資格が35歳以下と決められている。我々熟年研究者は次世代の育成に責任を持つと同時に、今のシステムを変えることを国に積極的に働きかけなくてはならない。

最後に、海外へ留学する研究者が激減し内向き志向になったことについて触れたい。確かに、有名研究者の下に留学して High impact journals に論文を発表し凱旋したというような話は、前近代的である。しかし、留学をポストドクであると認識した上で、国外の研究機関で数年間研究することは、国際的競争力を身に付け海外とのパイプを持てるだけでなく、異文化の理解や日本の良い点・問題点の発見など、貴重な人生経験を積める機会となりうる。国を挙げて国際化が進められようとしているが、海外との太いパイプを個人のレベルから構築しなくてはならないと、自らの使命を感じている。

3年前に、学振が、PDやRPD(出産・育児による研究中断後に研究現場に復帰できるよう平成18年度に創設された)のポストドク期間中に海外での研究を可能にする優秀若手研究者海外派遣事業を立ち上げたが、政権交代の余波で2回の募集で頓挫した。当時私が育成中のRPDは、申請が通り3ヶ月アメリカで研究してきた。この海外派遣申請にも受け入れ方の同意が必要であったので申請できたPD数は限られていたと思うが、150数名が理工分野から派遣されたようである。今後、海外でのポストドク経験者が増え、結果として海外の研究室との繋がりが再構築され、研究者間の交流が盛んになることを切に望む。

*東海大学工学部生命化学科教授, 日本生化学会評議員, Adjunct Professor, Beckman Research Institute of City of Hope